

京機会関西支部第 10 回京都あそ歩 2026.05.16

=== 深草の史跡であそ歩 ===

深草は、平安時代の辞典『和名類聚抄』の山城国紀伊郡不加乎佐。紀伊郡の名は、紀ノ川下流を本拠とした古代豪族で大和盆地の大和国平群県紀里（生駒郡平群町）に進出した、紀氏の拠点であったことに由来するといわれる。紀氏は倭王権の外交や軍事を担った。藤森神社は、紀氏の氏神で、祖武内宿禰を祀る。

また、前回訪問した葛野郡（嵯峨野）と並び、5、6 世紀に渡来系の豪族秦氏が進出した地でもある。日本書紀によれば、欽明天皇の頃に、秦^{あおつち}大津父が紀伊郡深草里に住んでいたとされている。伏見稲荷大社は、秦氏の祖霊を祀るが、伏見稲荷神社の奥の院、上之社（一ノ峯）、中之社（二ノ峰）、下之社（三ノ峯）は秦氏が進出する以前の前期（4 世紀後半）の古墳であり、麓にも後続する古墳があった。

紀伊郡の古代の歴史の流れを想像すると、「深草の平野部で京都盆地でいち早く稲作が始まり、弥生集落（深草遺跡）が形成された。古墳時代前期には、大和政権に組み込まれた深草の集団のリーダーが稲荷山に古墳の築造を始め（紀氏・賀茂氏？）、古墳時代中期になって、未開拓の山麓の微高地に秦氏が入植して水利を整備して発展、稲荷山の祭祀権を奪った。」

なお、京都盆地の縄文時代の遺跡は比叡山の麓の上終町遺跡や、京都大学敷地全域の北白川小倉町・別当町・追分町遺跡、吉田本町遺跡、吉田上大路遺跡があり、北白川追分遺跡の配石遺構と埋甕が理学部内に移設されている。

古くから山科から東国や大和への交通の要所の一つであり、稲荷山から大岩山の麓には古代から寺院が立ち並んでいた。明治時代には、旧東海道線が敷設され、第 19 旅団司令部、京都連隊区司令部、歩兵第 38 連隊がおかれた。

今回は、外国人で混雑している伏見稲荷大社は避け、弥生から近代までの様々な時代の遺跡・史跡と江戸時代の絵師伊藤若冲が晩年を過ごした石峯寺^{せきほう}と国学者で伏見稲荷神官の荷田春満の墓をたずねる。

コース 京阪墨染駅→1 藤森神社（トイレ）→2 旧陸軍第 19 旅団司令部跡→（3 おうせんどう廃寺・轟前堂^{がんぜんどう}廃寺）→4 谷口古墳→5 旧東海道線跡→6 仁明天皇陵→7 仁明陵北古墳・けんか山古墳→8 深草十二帝陵→9 真宗寺→10 番神社古墳跡→（11 伏見稲荷大社）→（12 稲荷山古墳群）→13 深草遺跡→14 石峯寺（トイレ）→15 荷田春満墓→うなぎ菊川→JR・京阪稲荷駅

1. 藤森神社

藤森神社はこの地域の産土神で、本殿には神功皇后ほか七柱が祀られる。本殿の裏手、北側には大將軍社があり、社殿は永享 10 年（1438）に足利義教が造営したもので、重要文化財となっている。大將軍社は、平安遷都の際に、王城の四方を護るために祀られた諸社の 1 つとされる。藤森神社の 5 月 5 日の祭礼において、境内で行われる「駈馬」はよく知られる。

藤森神社では毎年 5 月 5 日に藤森祭が行なわれる。藤森祭（深草祭）は貞観 2 年（860）、清和天皇の宝祚に際し行なわれた奉幣の神事が始まりとされ、菖蒲の節句発祥の祭ともいわれている。菖蒲は尚武、勝負に通じ、勝運の神として信仰



藤森神社本殿



藤森神社拝殿



大將軍社

を集めている。

旧御所の建物で重要文化財に指定されている本殿中央（中座）の祭神は、素戔鳴命・別雷命・日本武尊・応神天皇・仁徳天皇、神功皇后、武内宿禰の七柱。神功皇后が新羅より凱旋して、山城国深草の藤森の地を聖地にえらび祭祀をしたことが始まりとされる。

本殿東殿（東座）の祭神は舍人親王・天武天皇の二柱。舍人親王は『日本書紀』の編者であることから、学問の神としても信仰されている。

本殿西殿（西座）には、桓武天皇や子の平城天皇の即位に関連して横死した、早良親王、伊豫親王、井上内親王の三柱の怨霊を祀っている。

舍人親王：天武天皇の第 6 皇子。子の大炊王は孝謙天皇から譲位を受け踐祚（淳仁天皇）するが、藤原仲麻呂の乱で廃位された。子の貞代王、三原王の子孫は清原を賜姓される。清原氏傍流に清少納言。

早良親王：桓武天皇の弟。立太子されるが、藤原種継暗殺への関与が疑われ廃太子。淡路に配流が決まり、乙訓寺に幽閉されるが、絶食して自殺。遺体が淡路に送られた。後、桓武天皇の妃藤原旅子・藤原乙牟漏や母高野新笠の死亡、安殿親王の病気が早良親王の亡霊の仕業とされて崇道天皇号を追贈される。

伊豫親王：桓武天皇の子で右大臣・藤原是公の娘藤原吉子を母に持つ。平城天皇に対する謀反の罪により母藤原吉子とともに飛鳥川原寺に幽閉の上で飲食を絶たれ自殺した。

井上内親王^{いのみ}：聖武天皇の子で、桓武天皇の父光仁天皇の皇后。

光仁天皇を呪詛したとして皇后を廃され、子の皇太子他戸親王も廃された。奈良県五條の屋敷に幽閉され、2人は同日に死亡。自殺説、暗殺説がある。

井上皇后、他戸親王、早良親王、藤原吉子、伊予親王は各地の御霊神社の祭神として祀られている。御霊神社の祭神には、他に、橘逸勢（承和の変で伊豆国へ配流の途中遠江国板築駅で客死）。藤原広嗣（奈良時代末期、藤原広嗣の乱で値嘉嶋（五島列島）で捕らえられ唐津で斬られる）、文屋宮田麿（承和の変の翌年謀反の罪で伊豆へ流罪）、事代主命（大國主の子、国譲りで入水自殺）も祀られている。

2. 京都教育大学・旧陸軍第19旅団司令部跡

明治9年（1876）に京都府師範学校として創設され、昭和24年（1949）に新製の国立京都学芸大学となり、昭和32年（1957）に京都市北区から現在の場所に移転した。昭和41年（1966）に京都教育大学教育学部と改められて現在に至る。



旧陸軍第19旅団司令部
まなびの森ミュージアム

この場所には明治30年（1897）に第19旅団司令部、京都連隊区司令部、歩兵第38連隊が設置されていた。これらを統括する第16師団も明治41年（1908）に深草に置かれた。

昭和時代には第16師団は上海、南京へと転戦し、第19旅団は第19歩兵団へ編成替えされた。太平洋戦争でフィリピンへ移動すると、この場所には第53歩兵団がおかれたが、ビルマ（現在のミャンマー）へ転戦し、昭和20年（1945）に京都地区司令部が入り終戦を迎えた。

旧陸軍第19旅団司令部を改装した教育資料館（まなびの森ミュージアム）には創立以来の教材、教具、作品などが展示されている。200点以上の理化学実験器具、動植物や岩石の標本、古代エジプトのミイラの一部、絵画、書、彫刻、楽器、歴史文書、考古品などを所蔵し、不定期に開館している。

3. おうせんどう廃寺・^{がんせんどう}龕前堂廃寺

名神高速は深草から勧修寺へ伸びるが、ここは、古来東国への重要なルートであった。深草側の谷部は、深草谷口町という地名



おうせんどう廃寺礎石があった場所
東側に塔、金堂、講堂が並ぶと思われる

である。ここに、おうせんどう廃寺と龕前堂廃寺が、互いに谷を隔てて南北のゆるやかな斜面にある。ともに、開発で跡形もなく消滅している。おうせんどう廃寺は奈良時代後期から平安時代中期のものと思われ、土取り工事の際に、大量の

瓦、須恵器、緑釉陶器、仏像の破片などが出土した。さらに建物跡も発見されたらしいが、その詳細は不明である。

龕前堂廃寺は、奈良時代末期から平安時代前期の寺とされ、瓦や、須恵器、土師器、緑釉陶器、磚、銅銭などが緊急調査時ほかで出土した。建物跡などは確認されていない。★②



龕前堂廃寺付近
深草谷口公園北側が推定地

4. 谷口古墳

江戸時代前期、深草の谷口古墳が桓武天皇陵と考えられており、幕府の行った「元禄の修陵」でもここが修復の対象とされた。延暦寺が最澄の遠忌事業として陵墓に柵を設けた。文政4年（1821）に隣接地に深草・浄蓮華院を創建した。幕末の「文久の修陵」では所在地不明として修復されなかった。



谷口古墳
江戸時代には桓武陵に比定されていた



明治天皇陵
背後が伏見城本丸
左の峰二ノ丸（西丸）が桓武真陵？

伏見城西側にある現在の桓武天皇陵柏原陵は、明治時代に治定されたもの。真の桓武天皇陵は、現在の明治天皇陵の北側、秀吉が築城した伏見城二の丸付近にあったと思われ、築城により破壊されたと思われる。



『都名所図会 谷口桓武天皇陵』
秋里籬島・竹原春朝斎 安永9年（1780）

1 藤森神社 2 旧陸軍第 19 旅団司令部跡 3 おうせんどう廃寺・がんせんどう龕前堂廃寺 4 谷口古墳 5 旧東海道線跡 6 仁明天皇陵
7 仁明陵北古墳・けんか山古墳 8 深草十二帝陵 9 真宗寺 10 番神社古墳跡 11 伏見稻荷大社 12 稻荷山古墳群
13 深草遺跡 14 石峯寺 せきほう 15 荷田春満墓



旧東海道線跡 名神高速北側交差点



旧東海道線跡 名神高速沿い
線路跡に沿って家の向きが異なる



旧東海道線 山科駅跡 名神高速工事起点



5. 旧東海道本線

東海道本線京都駅―大谷駅（京津線大谷駅付近）間は、明治12年（1879）に開通した。当時のルートは、京都駅からは現在のJR奈良線を南に走り、深草十二帝陵南から東へ曲がり深草谷口町を通過して山科に抜けていた。大正10年（1921）の東山トンネル開通により北側にルートが変更になった。深草十二帝陵から仁明陵西側の人家の並びに線路の痕跡がみられる。山科では線路跡は府道35号線（大津淀線）と名神高速道路になっている。山科の中臣遺跡の南東、名神高速と京都市営地下鉄の交差点付近が旧山科駅跡で日本初の高速度道路名神高速道路はここから工事が始まった。

JR 東海道線

明治5年（1872）新橋駅―横浜駅間開業。

明治7年（1874）大阪駅―神戸駅間開通。

明治10年（1877）京都駅―神戸駅間開通。

明治13年（1880）京都駅―大津駅（現在のびわ湖浜大津駅付近）まで伸延。大津駅―長浜駅間には太湖汽船による琵琶湖経由の鉄道連絡船が開設。長浜から米原駅を通らず、関が原へ向かう線路があった。（現在廃線）

京都駅を出ると現在のJR奈良線のルートで南下し、稲荷駅から北東に向きを変え、勤修寺付近の旧山科駅、現在の京阪京津線の大谷駅付近の旧大谷駅を経て、長さ665mの旧逢坂山トンネルを抜け大津市街に到達していた。大正10年（1921）東山トンネルと新逢坂山トンネルを通過して京都駅と大津駅（現在の膳所駅）を最短距離でむすぶ新ルートが開通。

JR 奈良線（旧奈良鉄道）

明治28年（1895）奈良鉄道によって伏見駅―京都駅間が開業。

明治29年（1896）奈良駅―木津駅―京都駅間の全線が開通。桃山駅（現在の近鉄丹波橋付近）―京都駅間は近鉄京都線のルートを通っていた。

明治38年（1905）関西鉄道に譲渡。

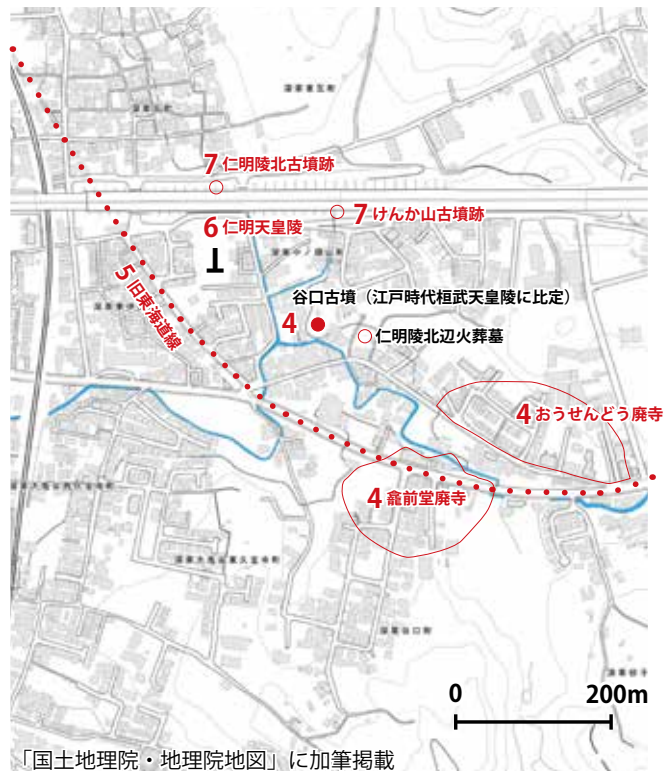
明治40年（1907）関西鉄道が国有化。

大正10年（1921）東海道本線の馬場駅（現在の膳所駅）―京都駅間が東山トンネル経由の現在の線に切り替えられたのに伴い、桃山駅―稲荷駅間の新線と稲荷駅―京都駅間の旧東海道本線が奈良線となる。桃山駅―伏見駅間が貨物線化され、伏見駅―京都駅間は廃止された。

近鉄京都線（旧奈良電気鉄道）

電化されていない奈良鉄道に対抗して、電化高速化を目的に当初大和西大寺駅から京阪伏見桃山駅間で計画された。

伏見桃山駅からは京阪に乗り入れを予定していたが、京阪では京都駅につながらないことと、京阪ダイヤに余裕がないことから、旧奈良鉄道の桃山駅―京都駅間の払い下げを受けて、現在の京都駅―大和西大寺間が昭和3年（1928）に開通した。



6. 仁明天皇陵

仁明天皇は第54代天皇で在位は天長10年（833）～嘉祥3年（850）。

桓武天皇の皇子で藤原式家所生の

兄弟、平城、嵯峨、淳和が順に即位した後、嵯峨天皇の第2皇子正良親王が即位した（仁明天皇）。母は橘嘉智子、女御に藤原良房（北家）の妹順子、藤原総経（北家）の娘沢子。皇太子には淳和天皇の子、恒貞親王がたてられ、嵯峨、淳和両皇統の迭立がはかられた。淳和、嵯峨院が死去すると、承和の変がおこる。恒貞親王を奉じて乱を起こそうとしたとして伴健岑は隠岐に流され、橘逸勢は伊豆への護送途中、遠江国で死去、恒貞親王は廃太子とされた。順子所生の道康親王（文徳天皇）が立太子。のち橘逸勢は怨霊となり御霊神社に祀られる。中納言に過ぎない藤原良房（北家）がこの事件の処理を任されて権力を得て、のち藤原北家が参議を独占し摂関政治を主導してゆく。



仁明天皇陵

7. 仁明陵北古墳・けんか山古墳

旧東海道線跡は名神高速と交差する。ここを左手、つまり東方へ少しゆけば、名神高速の建設で破壊された仁明陵北古墳が



仁明陵北古墳跡付近

あったところである。ここは稲荷山からのびてくる丘陵の端に立地し、墳形は明らかでない。埴輪列が確認されており、また、内行花文鏡、碧玉製腕飾、銅鏃などが出土したと伝える。番神社古墳の次の時期（前期）の築造とされる。

確認された埴輪列が後期初頭の特徴を持つことから、前期の仁明陵北古墳とは別の後期古墳「深草瓦町古墳」の存在が提唱されている。

また、すこし東方にも、けんか山古墳があったが、やはり名神高速建設によって破壊消滅した。墳形や規模は不明。碧玉製車輪石が発見されている。

8. 深草十二帝陵（深草北陵）

深草十二帝陵は深草北陵ともいう。持明院統（北朝）の後深草、伏見、後伏見、後光厳、後円融、後小松、称光、後土御門、後柏原、後奈



深草十二帝陵

良、正親町、後陽成の12人の天皇が葬られている。陵内には、安楽行院法華堂と呼ばれた法華堂（現在のものは慶応年間に建立）がある。この法華堂に後深草天皇以来、多くの天皇の分骨が納められてきた。

9. 真宗院

真宗院は浄土宗西山深草派。建長3年（1251）円空立信が現在地の南西に一字を建立。北朝持明院統の祖



真宗院

後深草天皇の勅願によって大御堂、釈迦・弥陀二尊の丈六像、経蔵、鐘楼、方丈等が建てられた。応仁の乱で焼失して以後荒廃し、誓願寺（河原町六角）の末寺となる。寛文・延宝（1661-1681）の頃に中興。大正4年（1915）本堂焼失するが昭和6年（1931）に再建。

宝暦9年（1759）に解剖図録「蔵志」を著した山脇東洋の墓がある。

10. 番神社古墳

白龍銭洗弁財天の北側に周濠をもつ全長50mほどの前方後円墳と伝え



番神社古墳跡 後円部跡

られる番神社古墳のあったところである。稲荷山古墳群の次の時期の築造と考えられているがはっきりとしない。

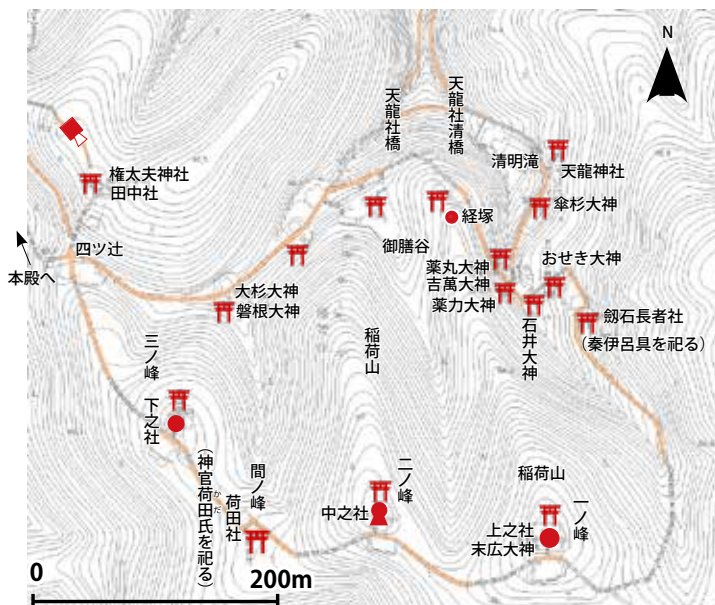


番神社古墳 国土地理院（1953）
航空写真に残る墳形

11. 伏見稲荷大社



JR 稲荷駅から稲荷山



稲荷山社殿配置図 京都市都市計画図に加筆

JR 稲荷駅を出るとすぐ目の前には、伏見稲荷大社の大きな朱色の鳥居が目に入る。この神社は、東山三十六峰の最南端、稲荷山の西麓に鎮座する。稲荷信仰の中心地として、全国に三万余を数える稲荷神社の総本社である。もともとは、現在の社地ではなく、和銅4年（711）、稲荷山三ヶ峰に鎮座したと伝える。式内社で祭神は、宇迦之御魂大神（下社、中央座）、佐田彦大神（中社、北座）、大宮能売大神（上社、南座）、田中大神（田中社、最北座）、四大神（四大神、最南座）の五座で、併せて稲荷大神と呼ぶ。その創建には、秦氏に関わったとされる。

五穀をはじめとするすべての食物や蚕桑を司る神という農業神としての元来の性格に加え、中世から近世にかけて、殖

産興業神、商業神、屋敷神としての性格も加わる。古来朝廷の厚い信仰とともに、上記の性格をもつことから、民衆からも盛んに信仰された。

稲荷山は、標高 232 m で、伝えられる、和銅 4 年の三ヶ峰への鎮座以前にも、この地域の人々の稲荷山への信仰があったものと考えられる。現在、この山には「お山巡り」と称して、山中の神蹟を参詣する習わしがある。この参詣路は、階段が設けられ、無数の朱色の鳥居をくぐりながら往くようになっている。

12. 稲荷山古墳群

稲荷山山頂は「お塚」といって、神名の刻まれた立石が所狭ましと立て並べられ祀られる。ここは、実は、直径 50 m の規模に推定される円墳（一ノ峰古墳）であるが、すでに大きく破壊されていて詳しく分からない。さらに、二ノ峰も、同じくお塚が祀られるが、ここは、全長約 70 m の前方後円墳である二ノ峰古墳である。後円部はかなり改変されているが、前方部はややその形を残すようである。かつて、仿製二神二獣鏡と変形四獣鏡が出土した（ただし、これらを三ノ峰古墳出土とする見方もある）。三ノ峰も同様に頂部はお塚で埋め尽くされるが、径約 50 m の円墳、三ノ峰古墳である。ここは、碧玉製勾玉がかつて出土し、祠の下には竪穴式石室が完



上之社（一ノ峰古墳）



中之社（二ノ峰古墳）



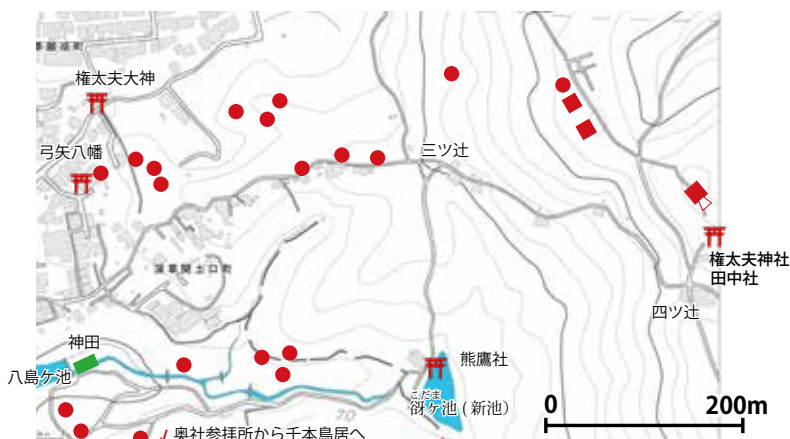
下之社（三ノ峰古墳）



権太夫神社北方の古墳？



参道に稲荷山古墳群墳丘



稲荷山古墳群

存するとも伝えられる。これらの古墳は稲荷山古墳群と呼ばれ、4 世紀後半代の古墳が、古くから信仰を集めた山の頂部にそれぞれ築かれていた。

13. 深草遺跡

龍谷大学一帯の扇状地、そして、沖積地には、弥生時代中期前葉から後期の遺跡である深草遺跡がある。

深草遺跡は京都市域では最も古くより弥生期の遺跡として知られていた。昭和 30 年代に、西浦町一帯で中期の多量の土器



深草遺跡遠望(龕前堂廃寺南側丘陵より)



NTT 深草の深草遺跡石標

と木器・石器類各種が出土した。昭和 41 年には南北方向の溝状の湿地が検出され、後期のものも微量含む同様な遺物が出土している。この溝状湿地は馬蹄形にめぐり、東や北へも遺跡が広がることが判明している。遺跡は稲荷山西麓に南北に带状に広がる湿地帯で水田などの生産域にあたり、居住域はより東方の段丘近辺の高地にあるものと推定される。

深草遺跡の南側、琵琶湖疎水と鴨川に囲まれた低湿地一帯にも、鳥羽遺跡、下鳥羽遺跡、下三栖遺跡など弥生時代の遺跡が広がる。

14. 石峯寺

正徳 3 年（1713）、黄檗宗萬福寺の第 6 世千杲性俊^{せんがいしやうあん}が開創した。本尊薬師如来像は恵心（源信）作と伝え、武家源氏の祖、多田（源）満仲の念持仏で、摂津多田郷（兵庫県川西市）に沙羅連山石峰寺を建立して安置していたものという。

大正 4 年（1915）に本堂が焼失するが再建される。しかし、昭和 54 年（1979）に放火によって本堂と本尊の薬師如来

焼失。昭和 60 年（1985）新たに釈迦如来を本尊として本堂が再建された。

寺の境内裏山にある五百羅漢の石像群は、安永年間（1772—1781）から天明年間（1781—1789）にかけて絵師の伊藤若冲が下絵を描き、住職密山修大と協力して制作したもので、「若冲五百羅漢」としていまも親しまれている。当時は千体以上あったが、現在四百数十体が残っている。

石像保存の観点より現在はスケッチ・写真撮影が全面的に禁止されている。

観音堂の格天井に若冲が天井画を描いた。しかし観音堂は幕末の安政 6 年（1859）以前に壊され、天井画は寺外に流出、現在は信行寺（左京区）や義仲寺（大津市）が所蔵している。

若冲は天明 8 年（1788）の天明の大火で、自宅を焼失し、寛政 2 年（1791）に石峯寺門前の草庵に隠棲。寛政 12 年（1800）85 才で没。寺内に墓があり。



若冲五百羅漢



若冲画

15. 荷田^{かた あづま}春満の墓

（寛文 9 年（1669）— 元文元年（1736））

江戸時代中期の国学者・歌人。賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤と共に国学の四大人の一人とされる

契沖の『万葉代匠記』を学び、『万葉集』『古事記』『日本書紀』研究の基礎を築いた。将軍・徳川吉宗に国学の学校建設の必要性を訴えた。弟子に賀茂真淵。

荷田氏は西大路・針小路・大西・松本・祓川・毛利などとともに、秦氏を出自とする伏見稻荷社家だったが、南北朝時代に稻荷領の代官をしていた小早川氏の配下、羽倉が勝手に荷田氏を名乗り祭祀の実権を握ったともいわれる。

現代、大西家だけ禰宜として残る。



荷田春満墓



若冲墓

京機会関西支部第 10 回京都あそ歩 2026.05.16

=== 深草の史跡であそ歩 ===

下尾茂敏（奥島研 1973 卒）

個人使用に限定